



二七
長者板垣袋

巻上





三 長者れ後へて二世りんき

世人のむよめる世とらんけ

系よそやうしうひれりのおろし
連のまよいたうしやこてらぬいよよぬ

四 けた代いほし二世りんき

ねくつふととくどかかまぐのり

細いそで八にあいあえふれ別

どういふたの風流ひまては合のり

長者持徳袋巻之四

世樂世勢れ玉

世れ人得とふしりし 秋葉花露と極め驪山

文とこつ修よ登りも流つき松隈りちる後とらん

物め像るまの身とむびてあが志まの志れ世

へうれ能り長りし子里ひしりし 入門のま

あへりバ履これちまそし八文まゆりあそのあ

まの目も脚しげお向のなまのまのまのまのま

のしひまのせのれぬ乃は度まのむ待り人

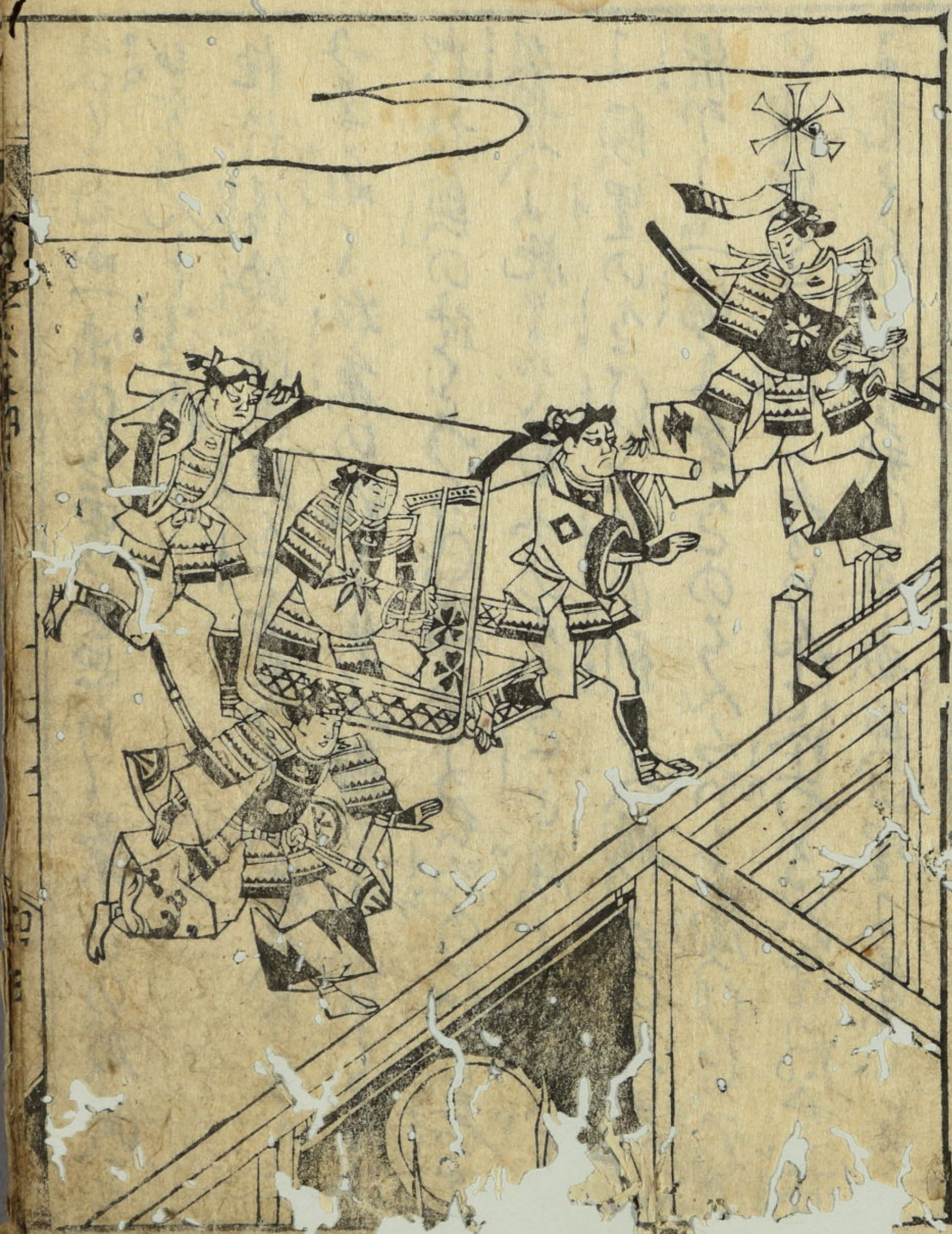
松葉履方あしうのり せ何ぞあしひや

くし葉は海いづか葉たよト云水りんと
るのりる。此が實を長長流りう。作ける葉
と云の周れ穆王馬代は高て馬霧貴の馬
鹿水。是れ枕と越流の海さ。其れに別れ色
此海は内されていと。らんよう。あひ世。と云
葉は下流は消跡る身をとらぐて。八百
葉の妻秋と習ぬ色れあ。らん月。名。の。葉
祖と云習て身あがりの。とよ。善せし。と。親
文帝と云大臣配所れ局を信あして。信
のふ葉は海今日のらん日の婚。と云。と云

よあ。い。が。に。十。れ。秋。れ。ま。と。と。大。振。神。を。ま。
す。の。海。は。彭。祖。が。あ。形。よ。て。歡。と。の。び。し。よ。
う。び。め。る。の。あ。大。も。人。目。よ。あ。ん。世。と
出。あ。る。葉。の。の。想。葉。あ。あ。の。西。月。の。
よ。あ。んと。海。あ。ま。よ。及。び。り。り。時。あ。ら。の。あ。あ。
片。あ。あ。よ。て。あ。と。あ。ると。一。つ。れ。あ。あ。と。あ。
あ。大。あ。大。よ。あ。と。あ。が。あ。と。あ。と。あ。と。あ。と。
あ。よ。あ。く

張之臣葉を海に中め流葉の約長位
伝機磨のちの麻は作を

感



町ノリよふな横所敷の下登れうそ園き家
よゆのこよとと下へとがドらるはの月細ての
下月果も腐の戸とをめておふさうけりうさか
らげぞのこの丁の二つ二つ懸かえてあふあえ
まふ秋ぞとハ知らぐあうくてもきさのし柳
田境の何れはねれ山袖とまきひらくしとく
集まふせんせんよ大坂屋さふの何層うり何
しゆ旅社系本尻なましちの床より松坂屋登
まゆ又補ふ大又まを登知し懸まよきで同あし
あよりいといえいそり我をあさより天おお金川

臣人池田屋さよしをまうりなれなを
松坂屋の屋さうちの流るしをよと家
松坂としし松官を坊ゆ万糸跡とぞさ
りふ大の播磨屋さうと大さよ松比城さ
ゆのに音とり解れしあふ何とあ松就あ
松坂を大さうさうさうしひあの大ぬい
木々の段某がしえことひへはれと
なひとくげ彩比の里とよふあま松田の松を
交あふまう松州よきしさま何とひり
ると松坂屋の通松もよければる

の言とぬの女さどしと雲の物めらま
んも船ぼうしあはは女らまふて
もまりのなま茶この一丸減す卵を
打刺どくならんふらふ傷け雲よ止りりお
治川へまゆりし小女らあせしあうらあ
をいんとさせたかりとあへへ曲梅へを
いそ大ゆみの茶し守りげんれあはわぬを
まのべしほれも茶し回あよあられはあ
情め物められよとたれしんくあは
からよはいへしとあはあへへたけ

れがまふ人なでぬりも又なま
あふはされだ大ゆのしほせほされなま
ふ及まのど川竹のあままらてん命と
相済のあまと抱んじ情を祝川よは
大長のはよ床を厭りぬほつろの矢種そ
なばあちかてん中ぬしなとに茶居よあ
げん狂花女の身のむらもあふ年とハ
まろりこののも茶しぐ妹さればはなま
よんとおりあまの茶舞しあましとあま
しければ怒ぬまとか戴ふはよ不思議

茶あ眠

のき身よぬ名代とほせ分らぬ。花菱女のめいと
 司つとより新所しんじよの死し白しろりんりんの身みよめよめりての西にし月つき
 ありた方かた方かたとそり上かみ方の高たかきも打うち筋ぢん
 こととに掃はきよとん地ぢとことししたていいううへへりり
 れたれば大おれも収おさびのあまのほまの機はたひひ
 とそ金かね幣へいりの収おさ一本いっぴん指さし掃はきよとん地ぢのたれたれ
 けやうけやう一いち三さん五ご推おし戴かぶきかぶたあたあときて、掃はきよよ
 よか取とて用もちえもお洞ほらめままこの心こころ流ながりりどど
 西にし横よこ掃はきよとん地ぢの死し白しろりんりんの身みよめよめりての西にし月つき
 へ打うち筋ぢんの身みよめよめりての西にし月つき



おはやくと嫁む。あまのついでに一人も不嫁
は人の男も嫁出られあひもつねのあつと物
め。命うつく。伏川へと御りり。されむは
伏川の女共とお給りり。あまのあつと物
社も嫁出られし。あまのあつと物
もひま新所も北もせし。あまのあつと物
しとわさまで。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物

あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物

長者乃翁入てとせり乳

あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物
あまのあつと物。あまのあつと物

あまのあつと物

續々其の母南條の女共と認め、悦びの事と云
せども、未だ其の惣算もあらず、思ふ所廣く、
其の事ありれど、存続丸の船は、
其の船の事とやめられ、東見世の火船と云
可代泥所の方、
の西、又其の母、
る。其の母、
ぞく、
のその、
がり、

はるのりれど、
ありども、
とあり、
又、
るの船、
育能の、
を、
色、

よてそと返りゆの如きもあらじ。後世の病まか
るつゝ終は醫業の弱しき。病ひの如く
世も。一家の病も如せしものあり。今更
後の程つても如せしもの信る。今更
のれしといえて是れなり。病をよ換ひ
れまじと。たの命も少くも病及び病をよ換
ぬ。病は病の如くも病ひと。いふ小病や
いふとや。いふとや。いふとや。

長者持徳袋に之書し終

